

■今の農業現場に必要なのは「土の科学」をきちんと学べるチャンス

green planning
プリーティローズ

主幹 関 祐 二

土壌改良という仕事にリスクはつきものである。指導員はその場の状況をいろいろな角度から調べ判断し処方する。しかし、百パーセント的中することはない。その時、農家もその原因をしかるべき原理に基づいて理解する努力をしなくては両者の発展はない。トラブル発生するとき、農家は経験と実際を知っていることで科学に正面から取り組まず、また、指導員も農家を分らず屋と決めつけてしまう。こういう状態をつくらないように、農家側も指導員側にも共通の科学的ベースを互いに持つことが必要となる。

そこで、課題は農学の中でも難解とされている土壌学。

この取っ付きの悪さ、それは土というものに形態のないこと、それに全く千差万別なこと……それより何よりも一番の障壁は学びたくてもそのチャンスがないことではないか。

巷には、^{ちまた}社会人向けに英会話だとか、何とかの資格だとか、学ぶ意欲のある人に様々の機会が設けられているのに……。

この現場の切実な要求に何とか対応しなくてはいけない。しかも、大学生向けの講義とは一味も二味も違う現場農業者向けにアレンジしてあるものでなくてはいけない。

この問題を具体的に解決しない限り、「土の科学」は農業生産に活用されない。

以下、今後展開されなくてはならない土壌診断、土壌改良の流れを示してみる。

農業経営に組み込める土壌改良、施肥改善の進め方

